

インド論理学の体系(二)

—Manikāna の和訳と註解—

宮 元 啓 一
石 飛 道 子

はじめに

今までの Navya-nyāya 研究

Manikāna にあつて

凡 例

〔和訳〕

I 直接知の章

A 吉祥なることがらについて

はじめに

インドでは古くから、論証の方法とその根拠づけについての考察が行なわれていた。その考察に携っていた人

びとの中には、ヴェーダ聖典よりもみずからの思考力のほうを上置き置くという、いわゆる正統ブラーフマニズムから見て許しがたい傾向も生まれた。そこで、正統ブラーフマニズムの側からも、ヴェーダ聖典の權威を積極的に行うという意図のもとに、みずからの論証学(itiyāsastra)を確立しようとする動きが現われた。その最初の集大成が、西暦三―四世紀に完成したと思われる伝ガウター(Gautama)造の Nyāyasūtra である。この書は、全体として、ヴェーダ聖典の權威のもとに、解脱を最終の目標としつつ、実践的な論証の手續きにこだわって

る。ただ、注目すべきは、論証の理論的な根拠づけとなる知識論(およびその知識の捉えるべきもの)との考察)の基礎を、Vaiśeṣikaśāstra(伝カナダ Kanāda 造、西暦一―二世紀ごろ)に代表される、構造分析論とも言うべき Vaiśeṣika 派の学説に負っているところにある。Nyāya-sūtra を根本のテキストとする人びとを Nyāya 派(Naiyayika)と言うが、このことが、のちのかれらの動向を決定した。すなわち、Dignāga(六世紀)を始めとする、いわゆる仏教論理学からの、主として知識論にまつわる精緻な論難に対抗して、かれらはみずからの知識論の整備に全力を投入し、ますます Vaiśeṣika 派との距離を縮めていった。その傾向の一大集約点に Udayana(十世紀)が位置している。このころから、かれらの間には、実践面(議論の進め方、勝敗の決定の仕方など)には目もくれず、厳密な定義と用語法を駆使して、知識論のみを没頭する学風が強まり、やがて Navya-nyāya 派(Navyāḥ [Navyāḥ] Naiyayika)というのがかれらの呼称として定着していった。この学風は、Vedānta 派である Śrīhaṣa の Khanḍanābhaṇḍakhaṇḍya の破壊的な論難によって飛

躍的に助長され、Gaṅgeśa(十三世紀)の Tattvacintāmaṇi という決定的な労作を生み出した。この派のこれ以降の歴史は、この作品の註釈的研究の歴史であると言いつて大過ない。また、他派の学者たちからもこの作品は積極的に研究され、利用された。Gaṅgeśa 以降のインドの哲学文献は、Navya-nyāya 派の学説についての知識なしには、充分に読みこなすことが困難である。

Navya-nyāya の学説は、確かに難解ではあるが、「関係」(saṃbandha)を基軸とするそのいわば関数的論理体系には、並々ならぬ問題性が含まれている。今のところ直観でしかないが、筆者には、その問題が解明できれば、西洋の伝統に根ざす現代の論理学にインド論理学がかなり大幅に関与しうる、ないし、論理分析の発想法そのものの転換を迫りうる、と思われてならない。十七世紀のものとして推定される Manikāna というきわめて簡潔な綱要書についての、われわれのこの試行錯誤の論稿が、その一助ともなれば幸いである。

本稿は、「はしがき」「凡例」を宮元が、「今までの Navya-nyāya 研究」「Manikāna にあつて」を石飛が、

作業上の問題として一応は担当したが、「和訳」「訳註」については、両者の完全不可分離な共同執筆に成る。

本稿は、数年前に宮元が（そして宮元を介して間接的に石飛が）東大大学院生の松本史朗、清島秀樹、船津和夫、金沢篤の四氏と行なった読書会の成果が出発点となっている。また、広島大学の宇野惇教授の論稿、および同教授から提供された貴重な資料がなければ、このようなかたちのものではすまされなかったであろう。四氏と宇野教授に深く謝意を呈するしだいである。

今までの Navya-nyāya 研究について

Navya-nyāya 研究といえば、厳密には Gaṅgeśa の著わした *Tattvacintamani* と、それにたいして書かれた Gadadhara にいたる膨大な注釈書類の研究ということになる。しかし広い意味では Navya-Vaiśeṣika 派折衷の立場から著わされた種々の綱要書もその対象に含まれる。⁽²⁾

これらを対象とする研究は今世紀に入ってからぼつぼつ始められたが、他派の研究に比べると研究の歩みは

非常にゆっくりとしていた。その最大の理由は Navya-nyāya 特有の難解さによると考えられる。

問題点は数限りなくあった。

まず専門用語の訳語やその用法上の問題、さらにそれを多用した長い合成語による複雑な表現の翻訳に関する問題、それからそれらの論理的解釈に関する問題など、さまざまな困難が研究の進行を妨げた。

Navya-nyāya の体系の基礎のひとつをなすのは徹底した実在論である。Iva, eva という接尾辞を付した抽象名詞にたいするいわば実体的な考え方は、ある場合には Russell のタイプ理論との類似を想起させるに至った。⁽¹⁾

もう一つの基礎は、すでに本稿「はじめに」でも触れたように、関係に関する概念の非常な発達である。この論理学においてはあらゆるものが二者間の関係において捉えられており、ある一つの事態は多くの関係の交錯した総体として表現される。学者の中には Navya-nyāya を称して関係論理学であるという人すらいるほどである。⁽²⁾

このほか、Navya-nyāya の特徴をあげるならば、内

包主義といふことができる。それは定義について *paris-*

kāra ⁽³⁾といわれるやり方をしているためである。この方

法は、定義項を被定義項の外延に一致させるため、外延にたいして内包を完全に網羅しようという意図に立つものであったから、定義項はいやが上にも長大となり、驚くほど長い合成語が適用されたりした。アリストテレス論理学に基づく外延的な考え方にのみ慣れている研究者たちは、このような傾向を批判的に評価し、Navya-nyāya を煩瑣な学として軽視するということもおこったのである。このような不利な状況の中で、Navya-nyāya 研究は始められた。以下、簡単にそれらを概観したい。

1. vyāpti 研究

最近はともかく、Navya-nyāya 研究の初期には、Navya-nyāya 研究史といえは *Vyāptipañcaka* 研究の歴史であったと言っても過言ではなう。さらにそれは記号化の歴史でもあった。

Vyāptipañcaka は *Tattvacintamani* の第二章 *Anu-māna-khaṇḍa* 第二節にあたり、Gaṅgeśa の主張する *vyāpti* の定義である *Siddhānta-lakṣaṇa* の節より前に

置かれて、彼の否定する前主張の一部を構成している。

そしてこれは従来 *Mathurānātha* の注釈 (*Vyāptipañcaka-ratnaśya*) によって読むのが一般的とされてくる。

この *Vyāptipañcaka* は *Mathurānātha* の注釈を最初の研究し、発表したのは Saleswar Sen である。一九二四年 *A Study on Mathurānātha's Tattvacintamani-ratnaśya* が発表された。⁽⁴⁾ これは五章からなり、一章の序文のあと、二章は年代論、三章は専門用語の簡単な解説、四章には *Vyāptipañcakaratnaśya* の部分訳、そして最後の五章は記号を用いて四章の訳について分析検討を行っている。この論文の構成は、Ingalls 等にもほぼ受け継がれている。ただ、後の研究では五章の記号による解釈を翻訳の中に含め、翻訳直後にその都度解説するという体裁を取るようになった。

このように、Sen の論文の構成は、後の研究の方法に示唆を与えるものであった。彼の作品は Navya-nyāya 研究の先駆的な作品として価値をもつが、それと同時にその中で行なわれた記号化も注目されるべきである。Sen は序の中でみずからつぎのように語っている。「I

の書は、Gangeśa の Vyāptipañcaka に対する Mathurānātha の注釈の一部を翻訳し分析することによって、Mathurānātha の様式、方法を説明することにある。そしてこの分析が現代の思考気質と一致するように、この目的のために採用した記号体系が用いられるであらう。」

彼の採用した記号は、西洋論理学の素養のもとに、Navya-nyāya の論理の特質を考慮して作成されたものである。彼はこれによって Mathurānātha の解釈の要点を簡略に解説した。これら記号の使用はのちの Ingalls, Staal などの記号化への布石となったのである。これら記号のいくつかは、そのままのちの研究者たちに取り入れられた。例えば、dharma を小文字を用いて示す表記法は、Ingalls に採用されている。

Navya-nyāya の記号化は、このように本来インド論理学と西洋論理学との比較研究の中から生れたものではなない。それらの発生の起源は、ただひたすら Navya-nyāya の思考形態の理解のためであり、西洋論理学の影響を受けているとはいえず、記号もそのために考案された便宜的

色彩の濃いものであった。「Navya-nyāya は、記号の用法を創案することは決してなかった。そのかわり、驚く程複雑な定型句の体系を作ったのであるが、それはわれわれがもはや記号なしには説明を考へることもできないような多くを説明しているのである。」⁽⁶⁾

Ingalls が述べている「Navya-nyāya 理解のために略号や符号を考え、それらによって Vyāptipañcaka や Mathurānātha の注釈を簡略に説明しよう」と試みた。しかし、それらはまだ便宜的なものにすぎず、Navya-nyāya の構造に対応する記号体系とは言いがたいものであった。

Ingalls は、Sen の影響を受けて、Gangeśa の Vyāptipañcaka と Mathurānātha の注釈とを二つの Materials for the Study of Navya-nyāya Logic とする書を書いた。⁽⁷⁾彼の研究は、Sen のものよりさらに精密、詳細であった。そして Vyāptipañcaka について Raghunātha の注釈 *Dīkṣit* からの抜粋の研究も付加している。

この書の第二章で、彼は専門用語と Navya-nyāya 特有の理論について解説している。彼が Sen 以前の用語の

解説については、一八九一年 Sanskrit で書かれた *Brief Notes on the Modern Nyāya System of Philosophy and its Technical Terms* とする小冊子があるにすぎない。⁽⁸⁾このほかには Navya-nyāya の重要概念、用語を集めた *Nyāyakośa* が存在するだけである。それゆえ、この章は専門用語をわかりやすく一般に解説したものであるが、そのみならず Navya-nyāya と西洋論理学との比較検討がなされていることも特筆に値する。

彼は、先ほど述べたように、Vyāptipañcaka 解釈に独自の便宜的記号化を適用したが、これとは別に Quine, Whitehead などの論理学による検討も加えている。彼は Vyāptipañcaka と DeMorgan の法則を適用しようとするなど、いくつか重要な発見をしている。しかしながら、この西洋論理学の理論を、彼が作成した記号化の中に反映させようとはしなかった。三章以下、実際の翻訳解説の中で行なわれた彼の便宜的記号化は、解説の補助的役割を果たすにとどまった。

このため、Ingalls の記号化には二つの立場が見出せ

る。ひとつは、Navya-nyāya の解釈を忠実に表現しようとする便宜的な記号化、もうひとつは、いわゆる西洋の記号論理学との比較研究のための記号化である。やつ、この Navya-nyāya の記号による研究に関してあらかじめその特徴について触れておきたい。

この Vyāptipañcaka に限れば、おおよそ記号化の発展は前者の立場の進歩発展であると言ふことができる。その記号化の変遷を見れば、Sen に始まり Ingalls, Bocheński, Staal, Goekoop などの Navya-nyāya 研究者たちがいかにその内容把握に骨を折ったかを知るに十分であろう。彼らは各々新しい記号を開発し、独立に記号化を行ない、解釈を発表したのである。彼らはそれぞれの記号化に精力を費し、その記号化をもってみずからの Navya-nyāya 説の解釈を提示したのである。

Sen, Ingalls の記号化は、いまだ便宜的な図式という域を脱していないが、Staal にいたって記号は体系的、法則的に Navya-nyāya 説を表現しようようになった。彼は Navya-nyāya の文章に現代記号論理学で用いられる記号を道具として応用したのである。とは言っても、

これは決して Ingalls の記号化における第二の立場に立つことを示すものではない。記号はあくまでも道具として Navya-nyāya の思考構造に適切に適用しようように考えられたのであった。

一方、どちらかと言えば西洋論理学の理論に従って Navya-nyāya を解釈するところ、Ingalls の記号化と言えは第二の傾向をもつ研究としては、S.S. Barlingay の *A Modern Introduction to Indian Logic* が考えられる。(6) このほか、内包主義をとると言われる Navya-nyāya に外延的思考が見られることを証明した、*Tārādhikā* の lakṣaṇa に関する Staal の論文 'The Theory of Definition in Indian Logic' にもこのような視点がうかがえる。(9)

Ingalls の示した二つの記号化は、のちの研究者たちにはっきりとその区別を意識されたわけではなかったが、研究の方法や方針の中にその傾向は示されていると見ることができる。

やがて Ingalls のあと、Staal 以前に Navya-nyāya について多少なりとも言及した人物は Bocheński がいる。

彼は *Formale Logik* の中で Sen, Ingalls の分析検討した Vyāpīṇaśāstra の五つの定義を関係論理学の用語を用いて定式化しようと試みた。(17) Bocheński は vyāpīṇa の定義を示す Sanskrit の文中から六つの二者間の関係をとりあげ、それを略号で表わし、それによって形式化した。したがって、これらの五つの vyāpīṇa の定義は、Sanskrit で表現されることおりの語順で記号化されたのであるが、abhāva, pratyogin, vitti 等の言葉が一樣に關係として理解されており、適切とは言いがたい。

Bocheński のこの記号化にたいし、Staal はつぎのように批判している。「Bocheński の形式化は、これらの定義がどのようにして生れ、また Text 中の議論の中でどのように扱われているかを示すわけではなかったのだ、まだ完全に成功したとは言いがたい。それゆえ、Sanskrit 表現の機能を研究するために用いることはできないのである」。(18)

と、このように述べた Staal は、インド論理学の形式化について、一九五八年 'Meas of Formalization in Indian and Western Logic' (19) 続く一九六〇年 'For-

mal Structures in Indian Logic' (14) 'Correlations between Language and Logic in Indian Thought' (15) など多くの論文を精力的に発表した。彼は基本的に言語と思考の關係に注意を向けて、論理構造が Sanskrit の専門用語でどのように表現されているかを現代記号論理学によって説明しようとした。

もともと Staal は、現代論理学に過大な期待をしているのではない。彼が現代論理学の記号をインド論理学に使用するのはその普遍性によるのではなく、現代論理学が Sanskrit と同系列のインド＝ヨーロッパ言語の中で発達してきたため、たがいに論理構造や法則が類似しているからなのである。

しかし Staal は、上述の論文の中で、*Siddhanta-muktavali* に説かれる二つの vyāpīṇa Gaṅgeśa の五つの vyāpīṇa の定義を記号化してみせた。彼は述語計算の記号によって Sanskrit による論理構造を説き明かした。彼はわずか二つの命題関数を用いただけで複雑な合成語を分解したのである。それは「おはしに存在する」を示す $A(x, y)$ 、 $B(x, y)$ を示す $A(x, y)$ 、 $B(x, y)$ を示す $B(x, y)$ である。

これら二つの関数を用いた記号化は、Navya-nyāya のもっとも基本的な構造である徹底した實在論を巧みに表示したものであるだろう。これによって、Navya-nyāya の重要な特質の一面が Sanskrit の表現にしたがってみごとに記号化されたが、實際上、記号化はかなり複雑な形態をとることになり、一見して容易に理解できるとは言えないのが難点である。とくに Navya-nyāya の特質の他の一面である関係概念を形式化の中に小文字で挿入したため、よりいっそう構造は複雑なものとなった。

これにたいし、C. Goetkoop は Hilbert-Ackermann, Frey として Staal の記号と非常によく類似する表記法を受け入れた第一階の述語計算を用いて記号化した。これを用いる利点として彼は二つあげた。(16)

(一) vyāpīṇa の定義の論理的同値と相違を証明しようとする。

(二) vyāpīṇa の定義のあいだで論理変形を言語上の変形から容易に識別することができること。
この記号化で、二項間の關係が表記の中に組み込ま

れ、Navya-nyāya の他の特質は明瞭に示されるようになった。彼は五つの vyāpiti の定義のそれぞれが論理的に同値であるということを示すことを主としていたため、この記号化はより厳密性を追求するものとなった。しかしその反面、この記号化から直接 Sanskrit の表現構造をうかがい知することは困難となってしまった。さらにまた、この記号化は Gaṅgeśa の説く趣旨を伝えることがなされてしまった。

彼は *The Logic of Invariable Concomitance in the Tattvacintāmanī* の中で、彼以前の Sen, Ingalls, Bocheński, Staal の記号化についても批判的に検討を加えながら紹介し、今述べたように、五つの vyāpiti の定義を論理的立場で記号化した⁽¹⁷⁾。これらの書では、Vyāpiti-pañcaka のなからず、Gaṅgeśa の *Tattvacintāmanī* の Anumānakhaṇḍa の最後の Anumitirūpaṇa-nyāyāpiti-pañcaka のあとに続く Vyāpitivāda のすぐつぎ英訳⁽¹⁸⁾、彼自身の注釈を付け加えている。

以上のように、Mathurānātha の様式、方法を分析するために行った Sen の記号化⁽¹⁹⁾二つの方法を使い分け

た Ingalls の記号化、論理構造を Sanskrit の表現構造に基いて説明しようとした Staal の記号化、同じく述語論理を用いているが Staal より論理的厳密性を追求した Goekoop の記号化と、研究の意図、目的の微妙な相違が記号化を大きく変えている。現在、記号化について有効な手段として関心を示す研究者たちは多いが、その様式はまだ定まるにはいたっていない。

やつ、Vyāpitipañcaka-nyāya 篇、ならびに *Tattvacintāmanī* の Vyāpiti-vāda などについては、このように多くの研究者たちの手でしだいに研究の範囲を拡げながら考察されてきた。研究対象を同じくしながら、これら記号論理学を導入して考察する傾向とは別に、まったく記号によらない逐語的解釈を行なっている研究者に Tara Sankar Bhattacharya がいる。彼は *Tattvacintāmanī* の Vyāpiti-vāda に関する、Mathurānātha, Raghunātha, Jagadīśa 等の諸注釈にのみならず、*The Nature of Vyāpiti* を著わした⁽²⁰⁾。彼も、さまざまな西洋の哲学者たちの見解との比較研究を行なっているが、解説は叙述的である。最後の九章にわずかに図式的解釈が見られるにすぎな

5。

以上の vyāpiti に関する研究は、Raghunātha の *Tattvacintāmanī* 並びに Mathurānātha の注釈を中心としている。この二つの著者 E. Frauwallner は、Raghunātha Śrīromaji に焦点を当てて Navya-nyāya 学派の研究を始め、今までとちがった方法論から Navya-nyāya を捉えようとした。

Raghunātha は、実質上 Navadvīpa 派の創始者と言いつつ、Gaṅgeśa は、重要な人物であると言われている。彼以後の *Tattvacintāmanī* の注釈者もほとんど彼の学派から出ている。この Raghunātha が実際に Navya-nyāya の中心にあるような位置を占め、彼の学説はどのような意義を持つ、そしてそれがどの程度全体系の正しい図式を与えているのかを確認するために、Frauwallner は彼の前の注釈者たち、Yajñapati, Jayadeva, Rucidatta, Vāsudeva, Śārvaḥaṇa 等の解説や写本によって紹介し、それらを検討したので、ひきつり Raghunātha の説を検討している。これは、Raghunātha Śrīromaji⁽²¹⁾ という論題名の論文として発表された。

Text として Gaṅgeśa の Vyāpiti-vāda の中の一節 Sāmānyābhāva-nyāyadhikarānābhāva を扱ったものがある。また、一九六七年に出られた続篇では、同じ方法論を用いて Siddhāntalakṣaṇa の節を検討している⁽²²⁾。そして扱われている Raghunātha 以前の注釈者には上記の人物の他 Pragalbha が加えられている。

II. vyāpiti 以外の研究

Tattvacintāmanī に関する研究は、vyāpiti 以外の研究はまだあまり多くない。まず有名なものが、B. K. Matilal の *The Navya Nyāya Doctrine of Negation* があげられる⁽²³⁾。この書の前半では Quine 等の記号論理学を交じって Navya-nyāya の主要な概念を解説し、後半部では *Tattvacintāmanī* の abhāvavāda などについて Raghunātha の Naiṣ-vāda の翻訳解説を行なっている。

このほかに Prāmānya-vāda に関する研究として、Mohanty の *Gaṅgeśa's Theory of Truth*⁽²⁴⁾ hetvābhāsa に関する研究として Nandita Bandyopadhyay の *The Concept of Logical Fallacies* など、徐々に進められている。

ちい、わが國の Navya-nyāya 研究にならう、まことに研究としては、まず *Siddhāntamūlcali* の推理の分野を和訳解説した宇野倬教授の『新正理学に於ける推論』⁽²⁴⁾があげられる。また、同じく宇野教授によって、つく最近「正理・勝論学説研究」という題名で、*Tarka-saṅgraha*, *Tarkadhīpika* の和訳、解説も発表された。⁽²⁵⁾これらの *Siddhāntamūlcali*, *Tarkasaṅgraha* などの書は、Nyāya-Vaiśeṣika 折衷の立場で書かれ、初学者のための綱要書として重要である。これらは純粹の Navya-nyāya の作品と比較すれば平易な表現で解説されているのでとりつきやすいとは言え、内容的には Navya-nyāya 独特の概念やそれによる解釈を含み、理解は容易ではない。宇野教授の和訳解説のうち、前者は Navya-nyāya の難解な理論を図示等で詳細に解説されている。また、後者ではとくに認識論、論理学について重点的に解説されており、Navya-nyāya 理解のために貴重な研究である。はしがきの資料紹介も有益である。

このような綱要書の研究のほか、宇野教授は、先に著した Mahēśa Chandra Nyāyaraṇa による Navya-

nyāya の専門用語を簡潔に Sanskrit で解説した小品 *Brief Notes on the Modern Nyāya System of Philosophy and its Technical Terms* を和訳、解説した「新正理学の術語」⁽²⁶⁾、インド論理学で用いられる限定詞を集めて解説した「インド論理学に於ける限定詞の用法」⁽²⁷⁾、Navya-nyāya の重要な概念的な概念を抜き出し簡潔に解説した部分を含む「インドの論理的思考」など多くの論文がある。これらは、Navya-nyāya の手引きとしても、非常に示唆に富んだものと言える。また、認識論の分野においては、宮元が「知識の真偽の根拠」と題して論文を発表し、哲学的にまったく新たな視点から問題を提起した。⁽²⁸⁾

以上、Navya-nyāya の論理学、認識論に限った主要な研究を概観した。Navya-nyāya におけるもうひとつの分野である言語 (śabda) 哲学の研究については、紙面の都合上触れることができなかった。これについては他日を期したい。

註

- (一) Ingalls, D.H.H. *Materials for the Study of Navya-*

nyāya Logic, Cambridge Mass., 1951, p. 77.

- (二) Guha, D.C. *Navya Nyāya System of Logic*, Varanasi, 1968, p. 56.

- (三) 宇野倬「インドの論理的思考——論議の形式と技法をめぐって」(『大東洋雑誌』一九七三年)一〇三頁—一〇七頁。

- (四) Sen, S. *A Study on Mahurāṇa's Tattvachintā-mūlcali*, Wagingen, 1924.

- (五) Ingalls, D.H.H. *Materials...*, p. 2.

- (六) 註(一) 参照。

- (七) Mahēśa Chandra Nyāyaraṇa, *Brief Notes on the Modern Nyāya System of Philosophy and its Technical Terms*, Calcutta, 1891.

- (八) *Nyāyakośa or Dictionary of Technical Terms of Indian Philosophy*, by M.M. Bhīmācārya Jhalakīar, Poona, 3rd ed., 1928.

- (九) Barlingay, S.S. *A Modern Introduction to Indian Logic*, Delhi, 1965.

- (一〇) Staal, J.F. 'The Theory of Definition in Indian Logic', *Journal of the American Oriental Society* 81, 1960, pp. 122—126.

- (一一) Bocheński, J.M. *Formale Logik*, Freiburg / München, 1956, p. 511—12.

- (一二) Staal, J.F. 'Means of Formalization in Indian and

Western Logic', *Proceedings of the XIIIth International Congress of Philosophy*, Venice, 1958, p. 222.

- (一三) 註(一) 参照。

- (一四) Staal, J.F. 'Formal Structures in Indian Logic', *Synthese* 12, 1960, pp. 279—86.

- (一五) Staal, J.F. 'Correlations between Language and Logic in Indian Thought', *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 23, 1960, pp. 109—22.

- (一六) Goekoop, C. *The Logic of Invariable Concomitance in the Tattvachintāmani*, Dordrecht, 1967, pp. 30—31.

- (一七) Goekoop, C. *The Logic...*, pp. 23—34.

- (一八) Tara Sankar Bhattacharya, *The Nature of Vyapti*, Calcutta, 1970.

- (一九) Frauwallner, E. 'Raghuṇātha Śrīmaṇi', *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ost-Asiens* (WZKSÖ) 10, 1966, S. 86—207.

- (二〇) Frauwallner, E. 'Raghuṇātha Śrīmaṇi (1 Fortsetzung)', *WZKSÖ* 11, 1967, S. 140—209 及び 'Raghuṇātha Śrīmaṇi (2 Fortsetzung)', *WZKSÖ* 14, 1970, S. 161—208.

- (二一) Matilal, B.K. *The Navya-Nyāya Doctrine of Negation*, Cambridge, Mass., 1968.

- (二二) Monanty, J. *Gauṇśa's Theory of Truth*, Calcutta,

- (23) Nandita Bandyopadhyay, *The Concept of Logical Fallacies*, Calcutta, 1977.
- (24) 宇野悋『新正理学に於ける推論』東海大学文学部リニア研究室、昭和四十六年。
- (25) 宇野悋「正理・勝論学説研究」〔広島大学文学部紀要』特輯号1、一九八〇年〕。
- (26) 宇野悋「新正理学の術語(1)」〔広島大学文学部紀要』第三十七巻、一九七七年〕、「新正理学の術語(2)」〔広島大学文学部紀要』第三十八巻、一九七八年〕、「新正理学の術語(3)」〔広島大学文学部紀要』第三十九巻、一九七九年〕。
- (27) 宇野悋「インド論理学に於ける限定詞の用法」〔関西大学『東西学術研究所論叢』三十八、昭和三十五年〕。
- (28) 注(3)参照。
- (29) 宮元啓一「知識の真偽の根拠——インド論理学派の知識論をめぐって」〔法政大学教養部紀要』第四十二号、人文科学編、一九八二年〕。

Manikana に ついて

Manikana は、一九五六年に、当時 Adyar Library and Research Centre の一員であった Sreekrishna Sarma の手記、同研究所による出版予定の稀覯本のリン

トの中から拾い上げられた。彼は、この発見をただひとりの写本をめぐり、逐語的な英訳と詳しい註解を付した Sanskrit の原典を *Manikana*, *A Navya Nyāya Manual* (Adyar Library Series, Vol. 88, 1960) とし、刊行した。この書の序文を書いているのは、すぐれた論理学者である Cochin の Maharaja, Ramavarma である。Adyar Library の *Manikana* の写本が発見されたことなるが、Maharaja は Cochin の Navya-nyāya 派の論理学を育成していることなるが、Staal は北東インドばかりではなく南インドでも Navya-nyāya が栄えたことなるが、現在も隆盛であることを指摘している (Review of Sree-Krishna Sarma, *Manikana*, *Journal of the American Oriental Society*, 82, 1962, p. 238)。

そして、この書は *Tattvacintamani* の要旨を簡潔に説いた手記 (prakaraṇa) である。Navya-nyāya 派の創始者 Gaṅgeśa の著とした *Tattvacintamani* は広く知られ、*Cintamani* であることは *Mani* の略称と呼ばれ親しまれていた。この書 *Manikana* はまさに *Gaṅgeśa* の著 *Mani* 作者の語彙辞典である (p. 2)。この

うなことから *Manikana* (*Mani* の註) とするこの作品の名称は、それ自体 *Tattvacintamani* の要約としない意味を十分に示していると言えよう。

この作品は、Nyāya-Vaiśeṣika 派折衷の立場で書かれた他の多くの綱要書とは明らかに異なる。これらの綱要書とは二種の、Nyāya 派の立場に立つ項目の列挙からなる *Tarkabhāṣa* のような作品と、Vaiśeṣika 派の立場に立つ項目を占める *Tarkasaṅgraha*, *Siddhāntaśuklāvālī* のような作品とに分かれる。前者は、*Nyāyasthāna* などによって Nyāya 派の項目の列挙にならざる、Vaiśeṣika 理論は prameya の項目の中に含まれる。一方、後者は *Prasastapādabhāṣya* の項目に従ってあり、pramāṇa は buddhi の項目の中に含まれる。 *Manikana* は、これらのそれぞれの立場の分類列挙のやり方と、*Tattvacintamani* の項目に従っている。即ち、全体は、pramāṇa の分類である pratyakṣa, anumāna, upamāna, śabda の四章に大きく分けられ、それらの中にさらに細かな節が設けられている。最初の Pratyakṣa 章 (māṅala-vāda, pramāṇa-v., pramāṇya-v.,

anyathākhyāti-v., sannikarṣa-v., samavāya-v., abhāva-v., pratyakṣakāraṇa-v., savikalpakanirvikalpaka-v. の六節と、*anyathā* (他) は *pratyakṣakāraṇa* 章 (anumiti-prakarana, vyāpṭi-p., vyāpṭigrahopāya-p., tarka-p., upādhi-p., pakṣatāp., parāmarṣa-p., kevalānvayi-p., kevalavyatireki-p., anuvayavyatireki-p., arthāpatti-p., nyāya-p., hetvābhāsa-p., isvarānumāna-p., śakti-vāda, kāraṇatā-v., mokṣa-v. の十節と、*anyathā* (他) は論理章を *śabda* 章 (śabdapramāṇya-vāda, yogyatā-v., ākāṅkṣā-v., āsatti-v., tāparya-v., śabdānityatā-v., uccinnapracchanna-v., vidhi-v., apūrvav., jātīśakti-v., śakti-v., samāsa-v., dhātusakti-v., ākhyātaśakti-v. の十四節と成る) は言語哲学を扱っている。このような Navya-nyāya の項目の列挙に従った綱要書は、現在知られる限りでは *Manikana* が唯一とされている。その意味でこの作品は非常に貴重なものである。

そして、この書 *Manikana* の作者、成立年代などの詳細については、今のところ何ひとつ知られていない。Sarma は「はじがめ」の中づ、われわれがこの作品に、ふしぎな唯一の情報、ある人物 Gopāla に教示す

るために作成されたということだけであると述べている。綱要書という性格のために、年代決定は一層困難であるが、Staal は *Mañikāya* が *Siddhāntamuktavali* (十七世紀) と同様、*saṃkara* は *jāti* となるための障碍である (*jātibādhaka*) とする説を採用している (cf. notes, *Pratyakṣa* 61)。この説は *Siddhāntamuktavali* の注釈 *Dinakarī* の時代には既に取らねばならなくなっているところを考慮して、十七、十八世紀には書きもびられていたであろうと推測している (Review of S. Sarma, p. 238)。

Mañikāya は、項目のたつ方にちがいはあるとはいえ、内容的には *Siddhāntamuktavali* に大差ない。ただ、ほかの綱要書に比べて特筆すべき点は、*Navya-nyāya* 派の保守伝統説に對立する新説を、*Navināḥ* である *Navyāḥ* の説として、積極的に採り上げているところにある。例えば、*Pratyakṣa* 章 *saṃavāya* 節とある *saṃavāya* は唯一であるところを、*Navyāḥ* の説へ *saṃavāya* は多数である (*nānāva*) とする見解も、あわせて説くところ等があげられよう (notes,

Pratyakṣa 85)。このほか *Mañikāya* 作者は、十六世紀初めにもわかれた革新的論理家である *Raghunātha Śiromaṇi* の説を受け入れている。Anumāna 章 *Kevalānva-yin* 節中に説かれた二重否定を、十一文 *ākāśābhā-vasyātyantābhāvo na pratiyogisvarūpāḥ* (p. 40) は、明かな *Raghunātha* の説に従っている。ちなみに、同章 *Mokṣa* 節では、*Śiromaṇi* の名があげられ、彼の説がとりあげられている。また、他学派批判に関しては、主に *Mīmāṃsā* 派に對する *Prābhākara* 派や *Bhātṭa* 派の説が散見される。

表現形式としては、*Navya-nyāya* の専門用語を用いて極めて簡潔な表現によつて書かれており、この綱要書特有の簡潔さのために、おそろしく *Sarma* の翻訳と註解なしでは理解が困難であろう。彼は、これらの用語の翻訳にわたって、*Athalye*, *Kuppuswamy Sastri*, *Vidyabhūṣana*, *Madhavananda*, *Suryanarayana Sastri*, *In-galls* などの研究を参考にした旨を述べているが、厳密にはそれらいずれにも従わなかったとも記しており、彼独自の立場に立つことを表明している。彼は、この書の

序説で、「方法論」「形而上的概念」「専門用語」「前提」の四分野に分けて解説を行なっている。これらには、簡単な *Mañikāya* を理解する上で必要な予備知識が要領よくまとめられている。特に、この中で最後の項目は、ほかの *Navya-nyāya* の一般概説の中に見ることのできない特色ある内容からなり、*Navya-nyāya* の基礎知識を得るために有意義であると考ええる。

凡 例

一、底本は *Mañikāya*, *A Navya-nyāya Manual*, edited with English translation and notes by Dr. E.R. Sreekri-shna Sarma, Foreword by H.H. Ramavarma of Cochín, The Adyar Library Series Vol. 88, Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1960, 196 pp. を用いた。

一、1、2などの節分けは訳者の判断による。改行も訳者の判断による。

一、どの語がどの語にかかるかを明確にし、読者の誤読を防ぐために、中黒(・)と斜線(/)の用法を特殊化した。まず中黒について言えば、中黒の直前にある語は、中黒の有効範囲における最後の中黒の直後に来る語にかかるものとする。たとえば、「美しい・水車小屋の・娘」とあれば、「美しい」

は「水車小屋の」を通り越して「娘に」にかかる。したがって、もしも「美しい水車小屋の娘」とあれば、「美しい」は「水車小屋」にかかる。なお、中黒の有効範囲は、句読点を越えないものとする。たとえば、「A・B・C・D」とあれば、AとBはCにかかるのみであり、Dにはかららない。また、中黒だけでは間に合わないときは、漢文の返り点の要領で、斜線を中黒の上位に置く。したがって、中黒の有効範囲は、句読点だけでなく、斜線を越えないものとなる。また、斜線の有効範囲は、句読点を越えないものとする。たとえば、「A/B・C・D/E/F・G」とあれば、BとCはDにかかり、AとDとEはFにかかるが、Gにかかる語はない。「A・B・C・D」のつく語がテクニカルに用いられている場合、短くして単純なものは「~性」ですませたが、長くて複雑なものは、その全体をくくって括弧で、全体として階次が上がっていることを示した。

【和訳】

I 直接知 (pratyakṣa) の章

【帰敬偈】

Jagannātha⁽¹⁾ に敬礼したのち
簡潔に著わされたこの作品が

栄えある Gopāla 君の頸に

「頸飾りとして」ゆらめかんことを！⁽⁹⁾

「書物を著わすさいには、まず最初に帰敬偈を述べ、神や師に敬礼するという、吉祥なることから (maṅgala) が、インドでは一般に行なわれている。このようなことが、作品を無事に書き終えるため方途であると考えられているのである。この節では、このような吉祥なことがらが仕事の完結の手段 (kāraṇa) であるのかないかが考察される。」

A 吉祥なることとがら (maṅgalavāda)

1 意図した仕事を開始するとき、仕事の完結 (sam-
ap-⁽⁴⁾) を望む有識者 (śiṣṭa) たちは、吉祥なることがらを行なう (ācaranti)。

2 このこととがら (Udayana はこのように言っている)。⁽⁵⁾ 吉祥なることがらは完結の原因であり、⁽⁶⁾ 障碍 (vighna) の已滅無 (dhyamśa) がその機能 (vyāpāra) である。⁽⁷⁾ ところで、完結とは、著作などの場合で言えば、最後の音素 (varṇa) であるその已滅無のことである。⁽⁸⁾ 以上、Ācārya (つまり Udayana) の見解である。

(jati) である。

つまり、Kadambari が完結していないというのは、吉祥なることがらに引き続いて生じた障碍のためか、あるいは、常識的な意味での (laukika) 原因を欠いているためか、そのいずれかである。⁽¹¹⁾

【とはいえ、結局のところ、】吉祥なることがらがなければ、障碍の滅 (＝已滅無) は決してありえないのであるから、肯定的にも否定的にも、不確定はな。以上が [Tattvacintā-maṇi] の著者 (つまり Gaṅgeśa) の見解である。

註

- (1) Viṣṇu のこと。
- (2) Śrīgopālācāryas. citāyus は、文字におおむね「長あへてく生命力を有する」を意味し、「春秋に富む」とほぼ同義で、年下の者にたいする敬称として用いられる。āyusmat (漢訳で「具寿」) も同義。
- (3) 「この作品が、栄えある Gopāla 君に牢記せられしめよ」との意。小作品を頸飾りに見立てることは、Śaṅkara に帰せられる Prāsnoctararatanamālīkā 第六十八偈にも見られる。ity eśā kaṇṭhaśā prāsnoctararatanamālīkā yeśam (この Pr. を頸にかけたる人……)。

3 「これにたいして、Gaṅgeśa の見解は以下のとおりである。」⁽⁹⁾ 吉祥なることがらは完結の原因ではない。なぜなら、吉祥なることがらがあっても、Kadambari の作者などの著作は完結しておらず、また、吉祥なることがらがなくても、酔乱したような (pramatta) 反ヴェーダの徒 (nastika) の書いた著作は完結しており、したがって、肯定的 (anvayatah) にも否定的 (vyatirekatah) にも不確定 (vyabhiçāra) があるからである。⁽¹²⁾

そうではなく「つまり Udayana の考えをいってはいなく」、吉祥なることがらによってもたらされるものは障碍の已滅無⁽¹³⁾ である。そして、それ「つまり障碍の滅」によって、「したがってまた」、妨碍者 (pratibandhaka) の関係無 (samsargābhāva) がそれに伴ってあるために、完結が生ずる。

ところで、障碍性 (vighnatva) とは「吉祥なることがらにたいして滅せらるべきもの」(maṅgalanāśyatā) の局限者 (avacchedaka) として、また、「完結の妨碍者」(sams-
appratibandhakatā) の局限者として成り立つる普遍⁽¹⁴⁾

(4) 有識者といふのは、Veda の規定を遵守する人のことである。「Veda を權威として認め、」しかる Veda におおて禁ぜられることを行なわねばならぬ人、その人は有識者である」(Tattvacintāmaṇi, Bibliotheca Indica, reprinted, Delhi 1974, p. 108). 英訳註では Śaśādhara の異論を紹介されている。Śaśādhara によれば、有識者とは「父師をなべへた人」(kṣīṇadosapuruṣa) (Nyāyasilhantatpā, I.D. Series 56, p. 2) のことである。有識者の行なら (śiṣṭācāra = śaśādhara, Kulīkabhāṭṭa ad Manusmṛti 2, 10, etc.) のことと、手続なることとがらである。Ci. Nyāyakośa, 'maṅgala'.

(5) Udayanācārya の見解を要する、Prācināh (14) Nai-
yāyikāh の見解を代表するものではない。

(6) 四我 (ātman) は内属する罪障 (無業: pāpa, adhar-
ma) の一類。Ci. Nyāyakośa, 'vighna', Sreekrishna
Sarma's note.

(7) この「原因」とあるのは、実質的には「手段」(kā-
raṇa) であると考へてよい。というのは、「機能」(vyā-
pāra) が問題にされるのは手段にすぎただけだからであ
る。(5) など、手段は最高原因である。Ci.
Nyāyabhāṣya ad Nyāyastotra 1.1.1, Pūjini 1.4.42,
etc.) 古 Nyāya 派は、手段がただであるだけでは結果を
もたないといふべきで、さういふわけは、結果をもたら

つれにたらし、Raghuṇātha Śrīraṁaṇi などの Navya-nyaya 派は、想定の簡潔性を重んじ、手段とは「結果とただちに結びついた原因」(phalāyogavyavacchinnaṁ kāraṇam) のことであるし、従来の機能にあたるものを手段、従来の手段にあたるものを原因一般へと格下げした。つまり、かれらは、機能という一項を不要のものとした。Cf. *Nyāyakośa*, 'kāraṇa', 宇野惇「正理・勝論学説研究」(『広島大学文学部紀要』特輯号1、一九八〇年、十二月)四三ページ。

「已滅無」(dhvamsa) は四種の無のひとつ、あるいは三種の關係無 (saṃsargabhāva) のひとつであり、有始無終である。

「已滅無」(divamsa) は四種の無のひとつ、あるいは三種の關係無(samsargābhāva)のひとつであり、有始無終である。

例として *Kirāntacoli* が挙げられてゐる。) しかし、*Kadambari* がかの有名な *Bānabhaṭṭa* の著作であるならば、*Manikana* がこゝで言つてゐる、立派な婦敬偈が置かれてゐるにもかかわらず中途で終つてゐる (著者の死のために) はずである。息子の子 *Bhūṣanabhaṭṭa* が後半を執筆していちおう完結の態を成さしめたことが何か理由となつてゐるのであるうか。あるいは、*Tarakadhipi* の挙げた *Kadambari* は、だれか別人の著作 (われわれの知らない) であらうか。あるいは、單純に *Annam-bhaṭṭa* の思ふぢがいであらうか。

(11) たゞね^た Kullitka ad *Manusmṛiti* 4. 163^た *nāsti* *kṛyam* || *nāsti* *paraloka* iti *buddhim* ^と *ね*。一般的に *は*、ヴェーダ聖典を權威として認めない者のことを指す。*Nyāyakośa* ^{によれば} *Cārvākāh*, 四種の *Baud-* *dhaṇ* (*Mādhyanikāh*, *Yogācārāh*, *Sautrāntikāh*, *Vai-* *bhīṣikāh*), *Dīgambarāh* の六派が *nāstika* ^と *ね*。

(12) 一般に、AがBの原因であるならば、AがあればBがあり (anvaya)、AがなければBがない (vyatireka) ことが要求される。AがあればBがあるとはかぎらない場合、つまり、AがあつてもBがないこともありうる場合が、anvayo vyabhiçārah である。また、AがなければBがないとはかぎらない場合、つまり、AがなくてもBがありうる場合が、vyatirekato vyabhiçārah である。吉祥なることがらと著作の完結との関係においては、こ

なお、Udayana の著作の中に、こゝで引用されている
 とおりの記述は見出せなかった。おそるゝ *Kirantavali*
 (Gaekwad's Oriental Series 154) の 'kṛtamaṅgalena
 cārabdham karma nirvighnam parisamāpyate pracī-
 yate ca. āgamamūlatvāc cāsyārthasya vyabhicāras
 na doṣāyā' ॥ ३३॥ (āgamamū-
 latvāc' ॥ ३३॥ *Tattvacintamani*, p. 72 以下) によつて
 する。

(8) たえば *kanah* で著作が終わっているならば、*h* 音、ないし *h* 音の已滅無が完結である、との意。この議論は、おそらく、語からいかにして意味の理解を得るかについての、音素説 (*varṇavāda*) の議論を適用したものであろう。

また、英訳註によれば、最後の音素の已滅無を採る根拠はつぎのとおりである。すなわち、音（*ṣaḥḥa*）の存続時間は二剎那（*arsaḥ*）にすぎない。最後の音素が完結であるとする、完結はわずか二剎那のあいだ存続するにすぎなくなる。そこで、最後の音素の已滅無（有始無終）こそ完結の定義にふさわしい、と。

(9) 以下、Udayana 説に代表される古説が批判される。

(10) Banabhaṭṭa (七世紀)。奇妙なことに、*Tantrikadhikṛṣṭa* においては、吉祥なることがらがなくとも完結している著作の例としてこの *Kṛāṇanbar* が挙げられている。(また、吉祥なることがらがあっても完結していない著作の

の二種の vyābhicāra が認められる。したがって、両者は因果関係にない、と断定せざるをえない。

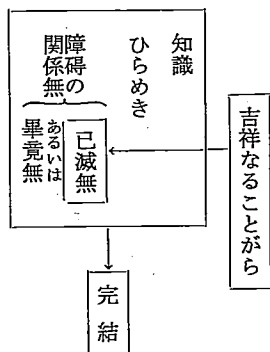
(13) いまり已滅無 (dhvaṃśabhāva)。無は、まず關係無 (不念無saṃsaṅghabhāva) と更互無 (anyonyābhāva) または區別 (bheda) とに大別され、關係無はさらに、未生無 (prāgabhāva)・已滅無、畢竟無 (atyatābhāva) に細分される。

(14) 障礙は完結の妨碍者である。一般に、AがBの妨碍者であるとき、Aという妨碍者の關係無（未生無であれ、已滅無であれ、畢竟無であれ）はBの原因であるとされる。そして、妨碍者性 (pratibandhakatva) とは、〈原因である無の対碍者〉 (karaṇibhūtabhāvapratiyogitva, *Nyāyakośa*, 'pratibandhakatva') のことである。定義 (karaṇibhūta)・障礙 (vighna)・已滅無 (abhava) の対碍者 (pratiyogin) である障礙が妨碍者 (pratibandhaka) である、という図式になる。つまり、上の一句によって、障礙の已滅無が完結の原因であるということが確認されているのである。

以上のように、因果關係は、吉祥なることがらと障礙の已滅無とのあいだ、障礙の已滅無と完結との間に別々に想定されるべきであり、吉祥なることがらは完結とは因果關係にない、というのが Navya-nyaya の定説である。

「*Siddhāntamūlaka*」の *maṅgalavāda* は、「知識 (buddhi) へは *pratibhā*」など、というひてその原因 (*kāraṇakalāpa* = *sāmagrī*)」が完結を生ずる」と述べられている。これにたいする註訳書 *Dīnakarī* は、「など」という言葉によって「障碍の關係無」が述べられているとする。つまり、完結にたいして、障碍の無はたしかに原因ではあるが、それだけではなく、より積極的には、著作をなすに足る知識、内容を構想、展開するひらめきが完結を生ずるのだとされる。

また、*Siddhāntamūlaka* の同じ箇所で、「ある場合には障碍の畢竟無が完結の手段である」とも述べられている。もちろん、畢竟無は關係無である。この場合には、吉祥なることがらは無用であることになる。ただ、障碍があるかないかは当面まったくわからないのであるから、吉祥なることがらは、たとえ結果的には無用に終



わったとしても、行なっておいたほうが安全だということになる。

そこで、吉祥なることがらから完結にいたるまでの因果關係を示せば上図のようになる。

(15) 「滅せられるもの」は必ず「滅するもの」を予想する。この場合、具体的には障碍が滅せられるものであり、吉祥なることがらが滅するものである。すると、このかぎりにおいて、障碍には「滅せられるもの」(*nāstyata*)、吉祥なることがらには「滅するもの」(*naśakata*) という属性があることになる。この属性どししは一種の相關關係にあり、これを *nirūpa-nirūpaka* 關係と称する (どちらが *nirūpa* であるかは可換的である)。この關係は、この場合には「滅せられるものと滅するものとの關係」(*nāśanāśakata*) ということになる。

ところで、この關係は、ひるがえって考えてみれば、相關する何ものかどうしの關係である。その相關する何ものかがいれば変数としてその中に組みこまれなければ、その關係そのものが云々されえないというしくみになっている。したがって、何ものでもないものに「滅せられるもの」という属性があるわけではなく、その場その場に即して何ものに「滅せられるもの」という属性があるのか、つまり、何が滅せられるものが当然問われることになる。ただひたすらにあたかも宙に浮いたようなかたちで「滅せられるもの」という属性があるわけでは

はないのである。この場面では、滅せられるものは障碍である。滅せられるものというだけでは不十分で、然とした広がりをもっているが、その広がりには必ずやその場に即した何ものかによって局限されている。こうしたことを *Navya-nyāya* 派は、障碍性が「滅せられるもの」の局限者 (*avachchedaka*) であると術語的に表現するのである。

(16) *sāmānya, jāti, sahaṇopādhi, akhaṇopādhi* のあいだの錯綜した關係については、宇野惇「インド論理学に於ける限定詞の用法」(関西大学『東西學術研究所論叢』一九六〇年十月) 六一九ページ参照。

(17) *Udayana* の *Kiriyatvā* (p. 3) には「吉祥なることがらがあっても完結しない理由として」(Kartikarmasā-dhanavaṅgūya)。

(2) たとえそうした欠陥がなくとも、障碍をひき起す原因のほうにより強力であること (*Siddhāntamūlaka* の *maṅgalavāda* では「より強力な障碍」と「障碍の積み重なり (*pracaya*)」が挙げられる) の二つが挙げられている。なお、*Kiriyatvā* は「(2) の対抗策として」「積み重ねられた吉祥なることがら」を説き、一本ずつでは弱くても、束ねられたワラは容易には切斷されないとその譬喩を引いている。

「吉祥なることがらがあつて」*Ka-*

dambhā の作者などの著作は完結していない」ことについての理由づけは行なわれているが、「吉祥なることがらがなくとも、酔乱したような反ヴァエダの徒の書いた著作は完結して」いることについては、何の理由も挙げられていない。これにたいして、*Siddhāntamūlaka* の *maṅgalavāda* に述べられている。

(1) 過去世に遂行しておいた吉祥なることがらのおかげですでに障碍がなくなっていること

(2) その仕事を行なう人に、そもそも障碍の畢竟無があること

という二つの理由を補足しておくことにする。

(以下次号)

(みやもとけいいち・法政大学講師)
(ふじの・みずい・駒沢大学講師)